

「主体的・対話的で深い学び」の視点で目的を明確にした授業づくり

－調査結果を活用した提案授業と研究会の支援－

副主幹・指導主事	富士池慎一
主 幹・指導主事	外川 陽清
副主幹・指導主事	山田 睦子
主 幹・指導主事	小林千由紀
副主幹・指導主事	中村 智司
副主査・指導主事	小林 美佳

キーワード 各種学力調査結果の活用 授業改善

研究の概要

研究協力校（山梨県総合教育センターが校内研究を支援・サポートする学校）における各種学力調査の活用等の支援の在り方に関する研究を行い、「主体的・対話的で深い学び」の視点で目的を明確にした授業づくりに寄与する。研究期間は2年間を基本とし、今年度はその1年目である。

研究協力校

南アルプス市立白根御勅使中学校

（以下「白根御勅使中」）

研究主題

「自ら学び 互いに高めあう 心豊かな生徒の育成～主体的・対話的で深い学びによる思考力・判断力・表現力の向上をめざして～」

笛吹市立一宮南小学校

（以下「一宮南小」）

研究主題

「自分の考えを持ち 表現できる子どもの育成～『かかわり』を大切にしたい学び合いを通して～」

I 主題設定の理由

本研究の主題を設定する際、まずは研究協力校の研究主題を念頭に置くことを第一とした。そのうえで、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善を行うためには、児童生徒の実態把握が欠かせない。そこで、全国学力・学習状況調査（以下「全国学調」）や本県が独自に実施している山梨県学力把握調査（以下「県把握調査」）の結果

分析を通して、課題を明確にすることが重要である。これらを踏まえることで、授業者が自身の授業を見直し、授業改善につなげることができ、目的を明確にした授業づくりにつなげられると考える。

II 研究の目的

各種学力調査の活用方法を、協力校を含めた多くの学校において実践できるよう、学校の特徴を生かした実践に寄与するとともに、事例の蓄積を通して、本センターのシンクタンク機能の充実を図る。

III 研究の方法

本研究の方法は以下のとおりである。

- ・各種調査の結果分析に基づき、研究授業で扱う単元を授業者と指導主事が協同して検討し、授業者と相談しながら児童生徒の実態に沿った授業づくりを推進していく。
- ・学習会、指導案検討、研究授業、研究会等の講師を派遣する。
- ・教員の変容を見取るために、校内研究会用のOPP（ワン・ペーパー・ポートフォリオ）シートを活用して検証の手立てとする。

IV 研究の経緯および結果と考察

1 研究の経緯

本年度の協力校への支援は以下のとおりである。本センター指導主事によるそれぞれの協力校への訪問人数は、白根御勅使中は延べ36人、一宮南小は延べ63人であった。

(1) 白根御勅使中

- 4月13日(月)
 - ・研究主題等検討
- 5月15日(金)
 - ・学習会「主体的・対話的で深い学びについて」
- 6月26日(金)
 - ・研究授業(社会)
- 7月28日(火)
 - ・全国学調(数学) 解答用紙回収
- 7月30日(木)
 - ・同上 採点・結果分析
- 8月19日(水)
 - ・学習会
 - ・全国学調結果説明
 - ・拡大校内研授業者との打合せ
- 9月25日(金)
 - ・研究授業(音楽)
 - ・拡大校内研究会の運営について打合せ
 - ・指導案検討
- 10月27日(火)
 - ・拡大校内研究会(数学)
- 11月26日(木)
 - ・研究授業(道徳)
- 12月3日(木)
 - ・研究授業(保健体育)
- 1月22日(金)
 - ・研究授業(国語)

(2) 一宮南小

- 4月24日(金)
 - ・研究主題等検討
- 5月29日(金)
 - ・部会研究計画検討
- 6月8日(月)
 - ・学習会「3点セットを取り入れた授業づくりの在り方について」
- 6月23日(火)～7月1日(水)
 - ・授業支援「3点セットを取り入れた授業 2年生 スイミー」(全7回)
- 7月3日(金)
 - ・学習会「2年生 スイミーの授業の実践報告」
- 7月31日(金)
 - ・集団づくりに関する研修
- 8月21日(金)
 - ・指導案検討

- 8月31日(月)
 - ・指導案検討
- 9月10日(木)
 - ・全国学調(国語) 解答用紙回収
- 9月14日(月)
 - ・全国学調結果説明
- 9月14日(月)～9月23日(水)
 - ・授業支援「3点セットを取り入れた授業 3年生 へんしんする食べ物をしょうかいしよう」(全10回)
- 10月7日(水)
 - ・研究授業(国語)
- 11月13日(金)
 - ・指導案検討
- 11月19日(木)～12月4日(金)
 - ・授業支援「3点セットを取り入れた授業 5年生 伝記を読み、自分の生き方について考えよう」(全7回)
- 11月30日(月)
 - ・研究授業(国語) 5年生
データ分析WGを踏まえて、国語科の課題と改善策を助言
- 12月18日(金)
 - ・報告会「3点セットを取り入れた1人1実践の報告」
- 1月15日(金)
 - ・部会研究の振り返り

(3) 山梨大学との連携による支援

本センターは、山梨大学教育学部附属教育実践総合センターとの連携・教育研究を行っている。本研究の推進に際し、4名のアドバイザーから指導・助言を得るとともに、協力校への支援もいただいている。本年度は、白根御勅使中の数学と保健体育の研究授業において、示唆に富む貴重な指導・助言をいただくことができ、学校現場の教員にとっても大変有益な機会となった。

また、本県では、「山梨県教育委員会と山梨大学教育学部との連携協議会」を立ち上げている。この連携協議会内には、本県学力向上に際し学術的な知見を得ることを目的として「全国学力・学習状況調査及び山梨県学力把握調査データ分析作業部会 略称「データ分析WG(ワーキンググループ)」を設定している。今年度、一宮南小の取組に関わって、以下のとおりWGを開催した。

6月19日（金）

- ・全国学調データ（小学校国語過去3年分）
分析（1回目）

7月2日（木）

- ・同上 結果報告

8月5日（水）

- ・全国学調データ（小学校国語過去3年分）
分析（2回目）

8月28日（金）

- ・同上 結果報告

10月29日（木）

- ・研究授業の報告（図1，図2）



図1 報告会の様子



図2 報告書の一部

このデータ分析WGにおいても先述の連携・教育研究のアドバイザーと同様に、研究授業や学習会にも直接学校現場に出向いていただき、7名の教授および准教授から指導・助言をいただくことができた。

2 支援の具体

（1）調査結果の分析に基づく授業づくりへの支援

本センター指導主事が、全国学調（国語，数学）の結果分析に基づく提言を行い、授業者と協同で研究授業の単元を設定した。

本年度は、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、全国学調が全国一斉に取りやめとなった。これを受けて本県では、県把握調査についても同様の対応をとることとなった。そのため各校は、それぞれの都合に合わせての実施となった。なお、県把握調査が予定通り実施できていた場合は、中学校第2学年の国語・数学・英語について調査することになっていた。

ア 白根御勅使中

白根御勅使中では、7月下旬に数学の調査を実施した。採点は、本センター指導主事も協力して行い、集計支援ツールを活用して結果の集計を行った。また、調査結果の分析についても、本セン

ターの数学科指導主事4名（高等学校担当の指導主事も協力）とともに行った。

分析結果については、8月の校内研究会の3学年部会で伝えた。学年所属の全職員にも伝えたので、数学以外の教員にも、数学の成果と課題を伝えることができた。その後、改めて数学担当教員とともに、生徒の解答状況を確認しながら、生徒の学習内容の定着状況を明確にするとともに、課題として主に次の2点を確認した。①「関数領域」に課題があり、「記述式」の設問における正答率が低く、無解答率が高い②「方法・手順の説明」について指導の充実・授業改善が求められる。

このことから、「身のまわりにある事象について、数学的に考察する場面で、他者と協同的に問題を解決したり、問題解決の過程を自ら振り返ったりする上で、方法や手順を的確に記述したり伝え合ったりすることは重要である」ことの共通理解を図った。そこで、拡大校内研究会における研究授業では、中学校3年生「関数 $y=ax^2$ 」の単元において、授業を行うことにした。授業者は、「関数 $y=ax^2$ の利用では、「用いるもの」（表，式，グラフ）を明確にした上で、その「用い方」（グラフの交点を読み取るなど）を記述する表現活動を取り入れ、「問題解決の方法を数学的に説明する力を高めていきたい」という願いを、本時のねらいとして位置付けて計画した。

イ 一宮南小

一宮南小では、9月初旬に国語の調査を実施した。採点は、本センター指導主事も協力して行い、集計支援ツールを活用して結果の集計を行った。調査結果の分析は、本センターの国語科指導主事2名で行った。分析結果については、9月に学校長と6年担任へ、11月の校内研究会で全職員に伝えた。6年生の担任以外の教員にも、国語の成果と課題を伝えることができた。また、山梨大学のデータ分析WGにおいても、調査結果および本センター指導主事による分析結果を確認してもらい、指導・助言を得ることができた。

以上の経緯から、一宮南小の児童の学習内容の定着状況を明確にし、課題として主に次の2点を確認した。①「書くこと」に関し、提示された文章，図についての問いに対して、求められている情報を取り出しつつ、適切な言葉で答えていくこと②複数の情報を取り出してふさわしい表現で答

えることについて指導の充実・授業改善が求められる。

このことから、自分の意見を考える場面において「根拠・理由」を明らかにしながら「主張（考え）」を考えさせる場を設定した。特に、自分の考えと友達の考えの共通点や相違点をきっかけに、自分や友達の考えのよさに気付くことや、考えを交流し合う中で自分の考えを見直す（確かさを確認する、付け足す、修正する）ことができることをねらいとして授業を構想した。

（２）研究授業（拡大校内研究会）への支援

全国学調の結果を踏まえ、授業者と本センター指導主事が連絡を取り合い、協同で指導案を作成した。拡大校内研究会当日は、山梨大学のアドバイザーを招聘し、研究会において指導・助言をいただいた。

ア 10月27日 白根御勅使中 拡大校内研究会（数学）

近隣の小・中学校や高等学校の教員及び今年度新たに研究主任となった教員など、71名が参観した（図3、図4）。



図3 授業の様子



図4 授業の様子

授業は、前述のとおり、3年生の数学「関数 $y=ax^2$ 」の単元において、問題解決の方法を数学的に説明する力を高めることをねらいとして行われた（図5、図6）。



図5 授業の様子



図6 授業の様子

事後研究会では進行係が協議の進め方を説明した後、小グループごとに付箋を用いて協議を20分間行い、グループ代表者が発表（1分×11グループ）し、山梨大学アドバイザーと本センター指導

主事から指導・助言をする流れである（図7、図8）。



図7 協議の様子



図8 指導・助言の様子

外部からの参加者もあったため、討議が活発に進むように指導案に沿ったスタイルの台紙を用意した（図9、図10）。



図9 討議の様子



図10 討議の様子

校種・教科の垣根を越えて、教科のねらい及び授業観察の視点に沿って教科指導に関わる活発な意見交換が行われ、学年経営や学級経営の視点からの意見も多くいただきました。

イ 11月30日 一宮南小 拡大校内研究会（国語）

新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、やむを得ず、外部からの参観者を招くことが叶わなかった。しかし、通常の校内研究会は行うことができた（図11、図12）。また、山梨大学のデータ分析WGメンバーからの学術的かつ専門的な立場から示唆に富む貴重な指導・助言も得られた。



図11 授業の様子



図12 授業の様子

（３）学習会や指導案検討等の通常の校内研究会への支援

協力校の実態、研究テーマ、抱える課題によって、研究の内容や方向性等は異なる。これにより、本センターの支援も、学校からの要請に個別に対応していくことが求められる。

白根御勅使中では、「主体的・対話的で深い学び

について」の実践的な理解を図りたいという願いから、5月にこのことについての学習会が計画されていた。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、本センター指導主事の訪問が制限されてしまった。そこで、急遽、学習会用の動画を作成し、配付資料、タイムテーブルを用意し、これらを事前に研究主任へ渡し、学習会運営のフォローを行った。学習会では、理論的な確認をしたのち、動画を視聴し、生徒の様子から「主体的・対話的で深い学び」を見取り、ワークショップ形式で意見交流を行った（図13、図14）。



図13 意見交流の様子

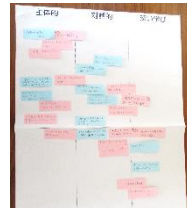


図14 成果物

一宮南小では、学習会に加えて授業支援も行うことができた。まずは校内研究のよりどころとしている「根拠、理由、主張」の「3点セット」について「3点セットを取り入れた授業づくりの在り方について」と題して、6月に学習会を行い教員の共通理解を図った。ここでは、本センター指導主事が国語の授業者、一宮南小の職員が児童という設定で、実際の授業に見立てて学習会を企画・運営した。（図15、図16）



図15 学習会の様子



図16 提示資料

この学習会を受け、実際の授業において1単元（2年生「スイミー」）の全時を通して授業支援を行った。この単元の授業を行う日は、本センター指導主事が毎回学校を訪問し、研究主任の提案授業をサポートした（図17、図18）。



図17 授業サポート



図18 児童のプリント

さらに、この実践報告とともに、改めて学習会を実施した。学習会においては、「提案授業」の単元づくりおよび指導案の書き方の伝達を行い、全7時間の略案とワークシート・板書計画・評価の具体例を印刷し、モデルを示した。

こうした一連の支援は、ここまでにとどまらず、全国学調の結果を踏まえて、改めて2学期に3年生の単元（「へんしんする食べ物をしょうかいしよう」）でも展開した（図19、図20）。



図19 授業の様子



図20 児童の作成物

（4）校内研究会用ポートフォリオの利用

校内研究会における、教員の毎回の学びを蓄積するために、OPPシートを用意した。シートは、A4用紙を横置きにし、3つ折りの両面印刷とした（図19）。毎回の校内研究会終了後、全職員が①本日の校内研で一番大切だと思ったこと、②次回までに自分が取り組みたいこと、をそれぞれ一言にまとめて記述していった。

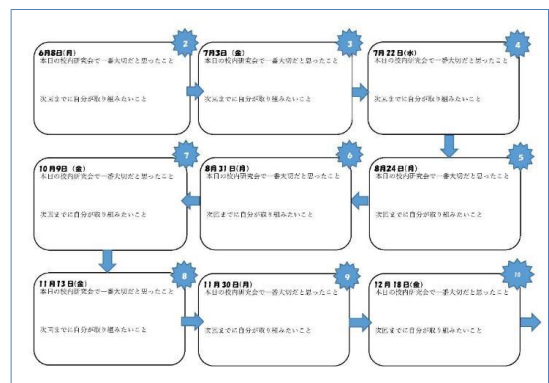
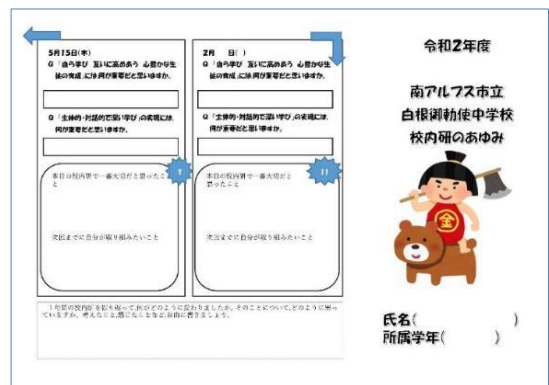


図19 OPPシート両面

V 研究の成果と今後の課題

それぞれの協力校の職員数が13~20名程度と、少ない人数であるため、OPPシートの記述の様子から教員の質的な変容を丁寧に見取り、研究の成果と今後の課題について考察した。

(1) 成果

研究一年目の成果を見取るうえで重要な位置付けとなる「拡大校内研究会」に焦点をあて、その時の教員の記述を、本研究の概要に示した視点に沿って分析することとした。

ア 「主体的・対話的で深い学び」の視点で目的を明確にした授業づくり

白根御勅使中の拡大校内研究会後のOPPシート「本日の校内研で一番大切だと思ったこと」の項目に、次のような記述がある。(下線は筆者)

- ・何を学ばせたいか、ということをお忘れずに授業を組み立てること。
- ・子どもたちにどこまで求めているのか、それを明確にする
- ・説明や記述を書かせる→どういうことが書けたら「できた」になるのか子どもに明確にする。
- ・「見方・考え方」を明確にした表現
- ・身に付けさせたい力をクリアにして、それを授業の中で実践していくこと。

また、一宮南小における同様の項目には、次のような記述がある。

- ・授業計画の段階で、課題に到達するまでに児童に何を考えさせるのか、どんな予想をたてるのだろうか、それに対してどう指導・支援するのかを考えることが大切。
- ・子どもたちに「書く」力をつけさせるために、プロセスを立てていくことが大切だと思った。目的を明確に達成するために何がどのような手立てが必要なのかをつかむ。
- ・おおもとの目標を明確にすること。

上記の通り、両協力校とも拡大校内研究会を終えて、「主体的・対話的で深い学び」の視点で目的を明確にした授業づくりが大切であることを改めて認識している様子がうかがえる。

イ 全国学力・学習状況調査の結果分析を通して、課題を明確にする

白根御勅使中の教員は、次のような記述をしている。

- ・足りない所を身に付けさせるようにどういう工夫をして授業改善していくか。〈伝える〉ことの難しさ。
- ・伝える力を育てること。

また、一宮南小の教員は次のような記述をしている。

- ・学力テストなどの結果、児童の「力」が弱いところを強化する。

このように、学力調査の結果から、児童生徒の実態を把握し、どのような課題がみられるのかを明確にしたうえで単元構想や授業の計画を行うことを認識していることがうかがえる。

一方、「次回までに自分が取り組みたいこと」の欄には、次のような記述もみられた。

- ・わかりやすく (伝える) 説明できる方法を生徒に教えたい
- ・数学の授業だけでなく日頃から、説明できるように自分の言葉で言えるような声かけ。
- ・言葉で表現できる英文

これらの記述は、技術・家庭科教諭、養護教諭、英語科教諭の記述である。

また、一宮南小でも次のような記述がみられる。

- ・三点セットの捉え方、他教科 (国語以外) での実施
- ・一年生のうちから少しずつ書くことをやっていきたいと思いました。
- ・三点セットでの授業の計画の実践 (国語以外)

これは授業者とは別の学年の教員が記述したものである。

以上から、「全国学力・学習状況調査の結果分析を通して、課題を明確にした授業づくり」が、研究授業で行われた数学科だけではなく、他教科の教員に対しても、「学力調査結果を踏まえた授業改善」を自分のこととして捉えることに寄与していることの表れであることが読み取れる。

(2) 今後の課題

OPPシートの記述から、今後の課題およびそれに伴い、来年度取り組むべき改善点として、以下の2点を挙げる。

ア 各種調査の確実な実施と全教職員による課題の共有

今回、白根御勅使中は数学を中心として、一宮南小は国語を中心として、それぞれの調査結果か

ら捉えられる課題を明確にし、説明する力・記述する力を育てるための数学や国語の授業改善を試みた。本来、新型コロナウイルスの影響を受けなければ、全国学調の国語や算数、県把握調査の国語・数学・英語（2年生対象）の調査結果も踏まえる中で、それぞれの学年、教科で課題を共有し、授業改善を進めることが理想であった。本年度はこのことが叶わなかったため、是非とも来年度は、予定通りの調査を実施し、全教職員で成果と課題を共有するとともに、課題を踏まえた授業改善につなげていきたい。

イ 全教職員によるカリキュラム・マネジメントを通じた課題の共有

OPPシート「次回までに自分が取り組みたいこと」の記述に、次のようなものがある。

・1回の授業ではできないことなので、計画的に進めていくことを考える。

説明する力や記述する力は一朝一夕に身に付くものではなく、単元を見通す中で、繰り返し計画的にかつ長期的な視野に立って指導していかなければならない。これは、1教科や個人に課せられた課題ではなく、学校全体として捉えられるべき課題であるとともに取り組むべき課題でもある。そのためには、全教職員によるカリキュラム・マネジメントが重要になる。各種学力調査を踏まえ、調査結果を活用して、児童生徒に付けさせたい力や課題を全教職員が共有し、各教科の年間指導計画を見通す中で、各教科の垣根を越えて取り組まなければならない。

おわりに

本年度は、新型コロナウイルスの蔓延に伴い、多くの予期せぬ制約や、突発的な対応を強いられる状況にあった。このような中で、2校の協力校に対して、全国学力・学習状況調査の結果分析を通して、課題を明確にした授業改善への支援を、できる限りの範囲で行うことができた。これは、偏に、研究協力校の「児童生徒の学力保障に向けた教員の普段の授業改善は、コロナ禍であるなしに関わらない」という前向きな取り組み姿勢に由るところに他ならない。

本年度の成果と課題を踏まえ、来年度も、研究協力校の立場に立ち、地に足の着いた地道な支援を積み重ねていきたい。

【研究協力校】

南アルプス市立白根御勅使中学校
校長 清水 英樹
笛吹市立一宮南小学校
校長 依田 宏記

【山梨大学連携研究会アドバイザー】

山梨大学 客員教授 氏原 一宏
山梨大学 客員教授 輿水 清司
山梨大学 客員教授 窪田 新治
山梨大学 客員教授 中込 和彦

【山梨大学データ分析WGメンバー】

山梨大学 教授 大隅 清陽
山梨大学 特任教授 青柳 達也
山梨大学 教授 田中 武夫
山梨大学 准教授 齋藤 知也
山梨大学 准教授 清水 宏幸
山梨大学 准教授 安藤 大輔
山梨大学 准教授 山際 基

【総合教育センター研究アドバイザー】

教育研究推進幹 田沢 憲
主幹・指導主事 中島 利秀